

平成28年度

体育センター長期研修研究報告

シュートをする機会が増える

球技：ゴール型ハンドボールの授業

—シュートにつながるステップの段階的な学習を通して—



神奈川県立体育センター

長期研究員

横須賀市立田浦中学校 才竹 健太郎

目次

第1章 研究を進めるにあたって

1	研究主題	1
2	主題設定の理由	1
3	研究の目的	2
4	研究の仮説	2
5	研究の内容と方法	2
6	研究の構想図	3

第2章 理論の研究

1	球技：ゴール型ハンドボールについて	4
2	ハンドボールのシュートに関わるステップについて	5

第3章 検証授業

1	研究の仮説と検証の方法	7
2	学習指導計画	9
3	学習活動について	12
4	授業の実際	14
5	検証授業の結果と考察	25
6	学習指導の工夫とその効果及び課題	30
7	授業全体を振り返って	33

第4章 研究のまとめ

1	研究の成果と課題	37
2	今後の展望	38
3	最後に	38

[引用・参考文献]

第1章 研究を進めるにあたって

1 研究主題

シュートをする機会が増える球技：ゴール型ハンドボールの授業
ーシュートにつながるステップの段階的な学習を通してー

2 主題設定の理由

中学校学習指導要領解説保健体育編における球技：「ゴール型」の第1学年及び第2学年では、「攻撃を重視し、空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前での攻防を展開できるようにする。」¹⁾とある。また、「ゴール型」とは、「相手コートに侵入し、シュートを放ち、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲームであり、ゴール型の種目に共通する動きを身に付けることが大切である。」¹⁾とある。福ヶ迫は、「ゴール型球技のゲームにおける最大の醍醐味は、シュートチャンスを演出し、シュートを決めることである。」²⁾と述べている。これらのことから、ゴール型において生徒がシュートをする楽しさや喜びを味わうことができるようにすることが重要である。実際に、本校の生徒たちも、事前のアンケートでは、「ゴール型のゲームにおいて楽しい場面はゴールを決めたとき」と約60%の生徒が回答している。しかし、実際の授業のゲームでは、シュートをする機会が少なく、シュートをする生徒も限られてしまうことが少なくない。

松本は、「ゴールを奪うためには、ボールを保持しながら前方方向に進む必要がある。シュートを打てる前方のスペースに侵入しゴールを奪うためにシュートを打つ。これが、侵入型ボールゲームの攻撃の目的となる。」³⁾と述べている。しかし、生徒の事前アンケートでは「ボールを保持しているとき、相手にボールを奪われないようにすること」に約67%の生徒が難しさを感じている。つまり、ボールを保持してからシュートをするまでの個人の動きに課題があることが考えられる。

佐藤は、ハンドボールにおいて「特にシュートやパスの基本的技術を習得する上で、ステップは最も重要な要素の一つであると考えられる。」⁴⁾と述べている。また、「ハンドボール競技は、ボールを保持して3歩まで動くことが許されることから、ボールを持ったプレイヤーの動きが容易になり、かつ多様化してくる。」⁴⁾とも述べている。このことから、ステップを使えばボールを保持したままの移動が可能となり、ドリブルやパスよりもボール操作が容易な分、ゴール方向に侵入する際も、相手にボールを奪われる可能性が低くなり、シュートにつなげることができる考える。

さらにステップについて佐藤は、「シュートに移行するまでの3歩の運動経過において、防御者をかわすためのかけ引き動作やシュートのための移動コースなど戦術状況に応じた選択可能な導入運動としても重要である。」⁴⁾と述べている。そこで、本研究ではこれらの課題に対して、ハンドボールの特徴的な動きの一つである「ステップ」に着目することとした。ステップの動きを身に付けることで、守備者にマークされる前に振り切ったり、守備者をかわしたりする動きができるようになる考える。さらに、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートを容易にし、シュートをする機会を増やすことにつながると考える。

本研究において、生徒はシュートにつながるステップの段階的な学習により、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートが容易になり、ゲームの中で多くの生徒がシュートをする機会を増やすことができるようになる考え、本主題を設定した。

3 研究の目的

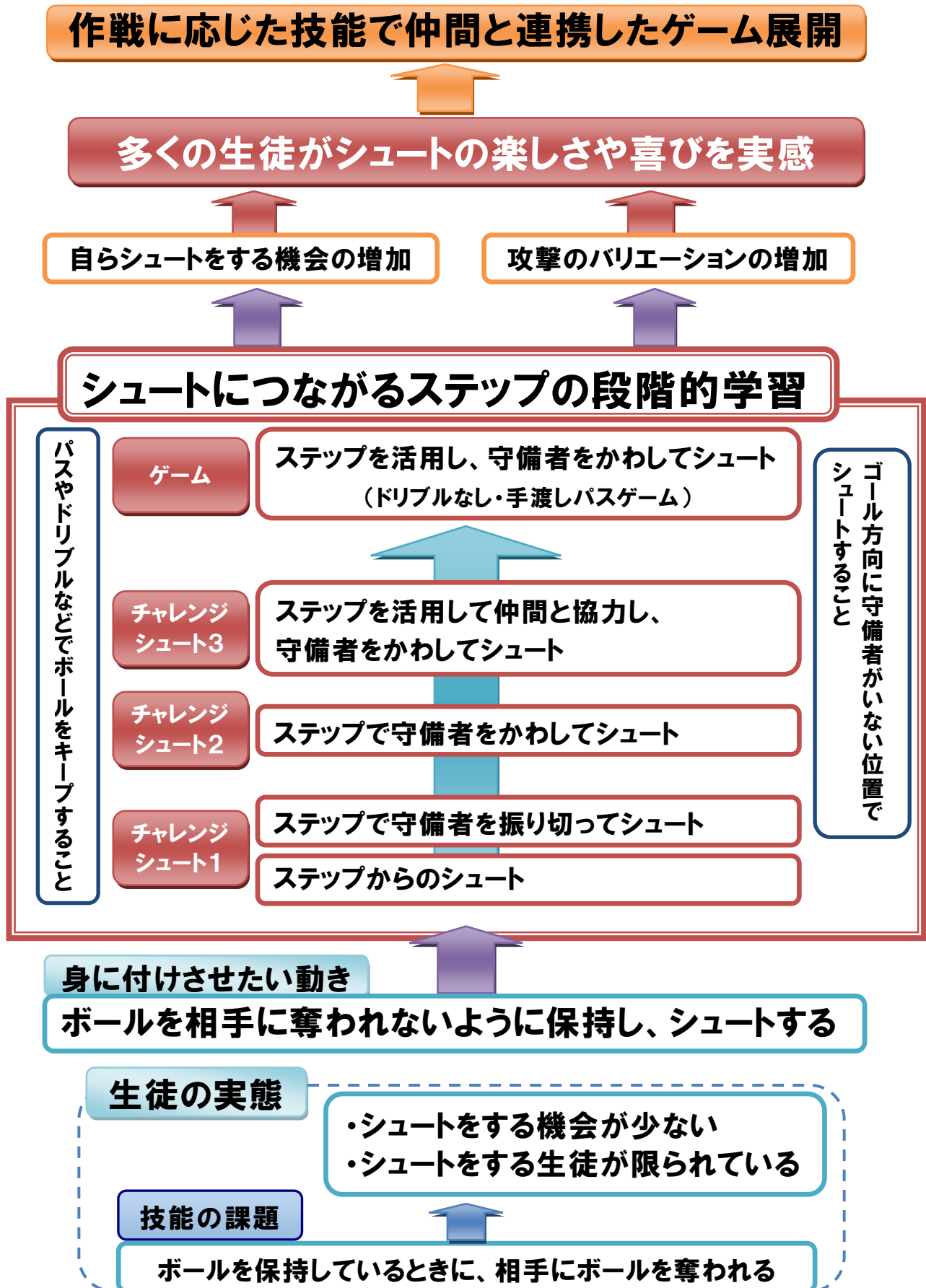
球技：ゴール型ハンドボールの授業において、ステップの段階的な学習により、守備者を振り切ったり、守備者をかわしたりすることができるようになり、ゲームの中でシュートをする機会が増えるようになる学習活動を提案する。

4 研究の仮説

中学校第2学年の球技：ゴール型ハンドボールの授業において、シュートにつながるステップの動きを身に付けることにより、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートを容易にし、ゲームの中でシュートをする機会が増えるであろう。

5 研究の内容と方法

- (1) 授業実践に先立ち、文献等により理論研究を行い、仮説を設定する。
- (2) 理論研究を基にした指導計画により、授業を行い、仮説の検証を中心に授業全体を振り返る。
- (3) 理論研究と授業実践を基に研究のまとめを行う。



第2章 理論の研究

1 球技：ゴール型ハンドボールについて

(1) 学習指導要領における内容²⁾について（以下抜粋）

中学校学習指導要領解説 保健体育編 E球技

[第1学年及び第2学年]

1 技能

(1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームが展開できるようにする。
ア ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。

(1) ゴール型

第1学年及び第2学年では、攻撃を重視し、空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前での攻防を展開できるようにする。

(2) ゴール型ゲームに共通する技能とそのポイント⁵⁾

表1は学習指導要領解説の例示にあるゴール型ゲームに共通する技能とそのポイントをまとめたものである。

表1 ゴール型ゲームに共通する技能とそのポイント（抜粋）

ゴール型に共通する技能（例示）		技能を効果的に発揮するためのポイント
ボール操作	ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすること	守備者をかわしたり、守備側の陣形が整う前に攻め込んだりしながら、ゴール方向に守備者がいない位置で、失敗を恐れずシュートをすることが大切である。
	マークされていない味方にパスを出すこと	フリーの状態の味方にパスをする。近くにいる味方だけでなく、有効な場合には、遠くの味方へもパスを出すために、視野を広くすることが大切である。
	得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと	ゴール近くにおいて相手にマークされていない味方や、前方にスペースがありそこに走り込んでシュートをねらえる味方に、パスを出すことが大切である。
	パスやドリブルなどでボールをキープすること	相手を引きつけながらマークされていない味方にパスを回したり、周囲の様子をうかがいながらドリブルをしたりして、ボールをキープし攻撃のチャンスをねらうことが大切である。
空間に走り込むなどの動き	ボールとゴールが同時に見える場所に立つこと	シュートに結びつけるために、ボールとゴールの方向が同時に見えるポジションと視野をとることが大切である。
	パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くこと	シュートをねらえる位置に走り込み、パスを受けるために手を挙げたり、声を出したりして合図をすることが大切である。
	ボールを持っている相手をマークすること	ボールを持っている相手がシュートやパスをしにくいようにすることが大切である。

(3) 教材としてのハンドボール

北原らは、「ハンドボールは子どもたちにとって同じ侵入型のゲームである『サッカー』や『バスケットボール』よりもパスやシュートに関わる運動技能の課題性（ボールの操作技術）が易しく、戦術行動の良し悪しを判断・評価しやすい」⁶⁾と述べている。

またハンドボールにおいて佐藤は、「ボールを保持して3歩まで動くことが許されることから、ボールをもったプレイヤーの動きが容易になり、かつ多様化してくる。」⁴⁾と述べている。このように、ボール操作が容易であり、他の動きにもつながりやすいことから、本研究ではハンドボールを教材として取り上げた。

2 ハンドボールのシュートに関わるステップについて

(1) 日本ハンドボール協会競技規則によるボールの扱い方について⁷⁾

第7条ボールの扱い方

次の行為は許される。

7の3 ボールを持って最高3歩まで動くこと。次の場合に1歩動いたと見なす。

- (a) 両足を床につけて立っているプレイヤーが、片足をあげて再びその足をおろしたとき、あるいは片足を他の場所へ移動させたとき。
- (b) プレイヤーが片足だけを床につけていて、ボールをキャッチした後に他の足を床につけたとき。
- (c) ジャンプしたプレイヤーが片足で着地し、その後に同じ足でジャンプして着地するか、他の足を床につけたとき。
- (d) ジャンプしたプレイヤーが両足で同時に着地し、その後に片足をあげて再びその足をおろしたとき、あるいは片足を他の場所に移動させたとき。

このことから、ボールを持って最高3歩まで動く事ができ、4歩目の足が地面に着く前にボールが離されれば反則にならない。また、ジャンプしてキャッチした場合、片足での着地は0歩（基準足）となり、さらに1歩多く（合計4歩）動くことができる。

(2) ステップの技術について

佐藤は、「多彩なボールテクニックや巧みなドリブル及びフットワークによるフェイントなどの『複合技術』が必要であり、このような技術は、『ステップ』をもとに行なわれる場合が多い。特にシュートやパスの基本的技術を習得する上で、ステップは最も重要な要素の一つであると考えられる。」⁴⁾と述べている。

さらに佐藤は、「ステップ法はパス技術においても大切な要素であり、戦術的に幅広く要求されている。またそれは、シュートに移行するまでの3歩の運動経過において、防御者をかわすためのかけ引き動作やシュートのための移動コースなど戦術状況に応じた選択可能な導入運動としても重要である。」としている。

本研究では、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートにつなげるために、ボールを保持して、守備者にマークされる前にステップでゴール方向へ進む動きを「守備者を振り切る」とし、守備者のマークをステップでかわして進む動きを「守備者をかわす」とすることとした。

(3) シュート動作の局面について

熊谷は、シュート動作の局面について次のように述べている。「『助走』、『準備局面』、『主要局面』、『終末局面』、『受け身』と大きく5つの局面に分けることができる。『助走』の位置は、ゲーム状況やディフェンスの干渉の程度によって使い分けるべきものである。パスをも

らう前から助走を始め、より早くシュートモーションに入ること、またはスピードに乗って主要局面に入ることが重要である。」⁸⁾

このことから、本研究ではボールを保持してからのステップの動きとともに、シュート動作における「助走」にも着目することとした。

(4) シュート動作の局面におけるステップについて⁴⁾ (以下抜粋)

右利きプレイヤーが3歩の規則でシュートへ移行する場合の局面的特性は、以下のようにまとめられる。

◎0歩としての右脚は→a局面

- ・ボディコントロールの支持足となる。
- ・スピード走に移行する基準足となる。
- ・1歩でシュート動作を完成させるときの蹴り足となる。

◎1歩目の左脚は→b局面

- ・欺瞞プレーのゆさぶり足となる。
- ・移動コースを決定づける足となる。
- ・1歩でシュート動作となった場合の制動足となる。

◎2歩目の右脚は→c局面

- ・シュート、タイミングに変化をもたらす足となる。
- ・サイドまたはクロスステップに移行する選択足となる。
- ・防御者との間合を調整する足となる。
- ・シュートへ導くための蹴り足となる。

◎3歩目の左脚は→d局面

- ・防御者をかわす足となる。
- ・シュート角度を有利に確保する足となる。
- ・シュート時の制動足となる。
- ・ジャンプ及びプロンジョン法^{*}へ移行する場合の踏み切り足となる。

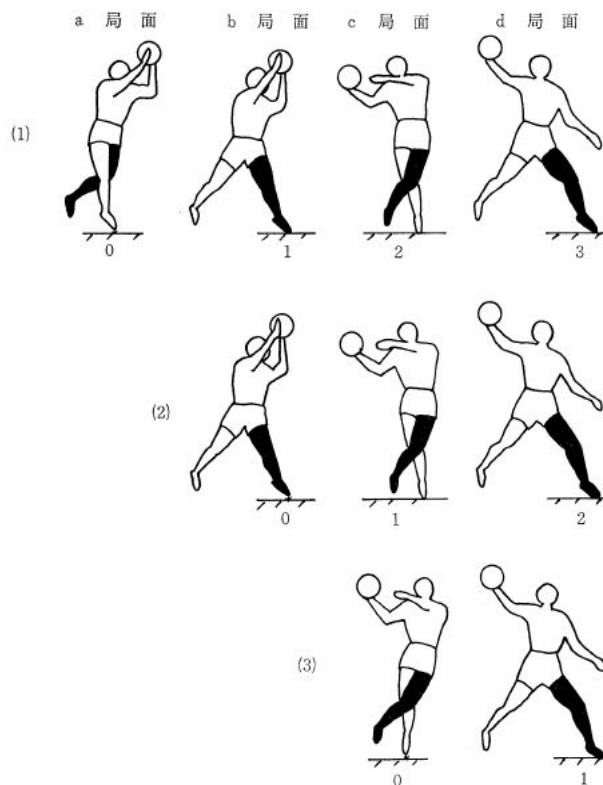


図1 右利きプレイヤーの歩数ごとの局面

※倒れ込み、あるいは飛び込んで行うシュート

c～d局面においては、シュートという運動課題を解決するために「スピードあるランニングから右脚→左脚の連続的な振りによって生まれる力を蓄積し、同様にシュートの最終時点での左への上体の大きな捻りによって生まれる力をうまく利用する」⁹⁾ことが大切となる。左脚の踏み込み角度によって、守備者をかわすことが容易となるばかりでなく、踏み込む距離(スタンス)のとり方でリリース時に高低の変化をつけることができ、より一層ステップ法の効果が得られるものと考えられる。

また、「ステップ法の運動経過c～d局面は、シュートという運動課題を解決するための主要な局面である。」⁴⁾ということから、シュート時にc～d局面に当たる2歩をステップとして踏むことができるかが大切なこととなる。そこで本研究では、シュート時のステップの歩数、特に2歩以上の歩数に着目することとした。

第3章 検証授業

1 研究の仮説と検証の方法

(1) 研究の仮説

中学校第2学年の球技：ゴール型「ハンドボール」の授業において、シュートにつながるステップの動きを身に付けることにより、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートを容易にし、ゲームの中でシュートをする機会が増えるであろう。

(2) 期間

平成28年9月14日（水）～10月18日（火） 11時間扱い

(3) 場所

横須賀市立田浦中学校グラウンド

(4) 対象

第2学年4組（39名）

(5) 単元名

球技：ゴール型ハンドボール

(6) 方法

ア 単元学習指導計画立案

イ 実態調査と分析（予備アンケートや事前・事後アンケート等）

（ア）予備アンケート 7月8日（金）実施

（イ）事前アンケート 9月7日（水）実施

（ウ）振り返りアンケート 9月14日（水）実施

（エ）事後アンケート 10月26日（水）実施

ウ 授業実践

エ 映像の分析

オ 結果の分析

(7) 分析の視点と方法

分析の視点	観点	具体的な分析の方法
(1) シュートにつながるステップが身に付いたか	ア シュートにつながるステップの歩数の変容	映像分析 3分間のゲーム シュートにつながるステップの歩数とその割合を映像から分析。 ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)
(2) ステップにより守備者を振り切り、守備者をかわすことができたか	ア シュートにつながるステップでの移動距離の変容	映像分析 3分間のゲーム シュートにつながるステップでの移動距離を映像から分析。 ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)
	イ ステップによりゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした本数の変容	映像分析 3分間のゲーム ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした本数を映像から分析。 ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)
	ウ ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした際の守備者を振り切るステップの回数と守備者をかわすステップの回数の変容	映像分析 3分間のゲーム ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした際の守備者を振り切るステップの回数と守備者をかわすステップの回数を映像から分析。 ＜ハーフコート3対2ゲーム＞ (6 時間目) ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)
(3) シュートする本数や人数が増えたか	ア ゲームにおけるシュート本数の変容	映像分析 3分間のゲーム シュート本数を映像から分析。 ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)
	イ ゲームにおけるシュートした人数の変容	映像分析 3分間のゲーム シュートした人数を映像から分析。 ＜オールコート4対4ゲーム＞ (1、11 時間目)

2 学習指導計画

(1) 単元目標 (第1学年及び第2学年)

ア 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームが展開できるようにする。

・ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開することができるようにする。〈技能〉

イ 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。〈態度〉

ウ 球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。〈知識、思考・判断〉

(2) 評価規準

ア 「E 球技」の評価規準に盛り込むべき事項【第1学年及び第2学年】

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
球技の楽しさや喜びを味わうことができるよう、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどや、健康・安全に留意して、学習に積極的に取り組もうとしている。	球技を豊かに実践するための学習課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	球技の特性に応じて、ゲームを展開するための基本的な技能や仲間と連携した動きを身に付けている。	球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力、試合の行い方を理解している。

イ 「E 球技」の評価規準の設定例【第1学年及び第2学年】

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを守ろうとしている。 ・分担した役割を果たそうとしている。 ・作戦などについての話合いに参加しようとしている。 ・仲間の学習を援助しようとしている。 ・健康・安全に留意している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ・自己やチームの課題を見付けている。 ・提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。 ・学習した安全上の留意点を他の練習場面や試合場面に当てはめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール前での攻防を展開するためのボール操作と空間に走りこむなどの動きができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・球技の特性や成り立ちについて、学習した具体例を挙げている。 ・技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ・球技に関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。 ・試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

ウ 本研究で扱う評価規準（中学校第2学年球技：ゴール型「ハンドボール」）

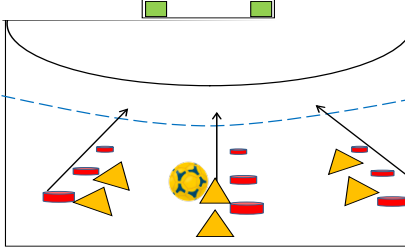
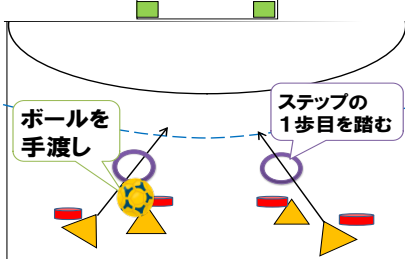
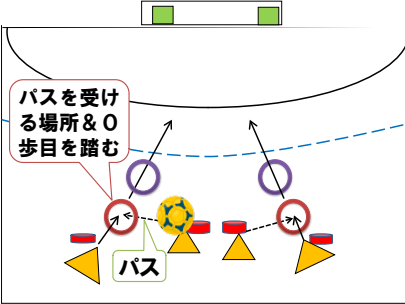
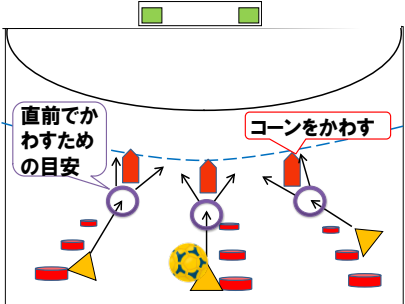
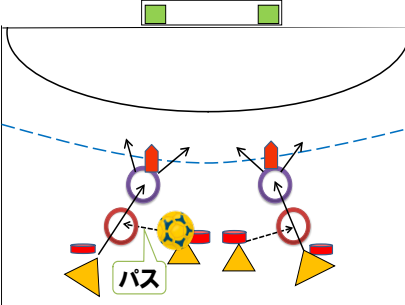
運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ①分担した役割を果たそうとしている。 ②仲間の学習を援助しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ②自己やチームの課題を見付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。 ②パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ②試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

(3) 単元指導計画

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
		ドリル:ランニングパス、ランニングクロスパス、三角パス										
5	オリエンテーション											
10												
15	基礎練習											
20	ランニングパス シュート	ドリル確認 ツーンパス 三角パス シュート練習	シュートゲーム 2対0	チャレンジ シュート1 パスを受けてス テップからの シュート 味方からの手渡し ↓ 味方からのパス	チャレンジ シュート3 ステップを活用し 仲間と協力して守 備者をかわして シュート 2対1	チャレンジ シュート3 ステップを活用し仲 間と協力して守備 者をかわしてシュート 2対1→3対1	チャレンジ シュート3 ステップを活用し仲 間と協力して守備 者をかわしてシュート 3対1	チャレンジ シュート3 ステップを活用し仲 間と協力して守備 者をかわしてシュート 3対1	チーム練習 チームの課題を確 認し、それに応じ た練習を選択して 行う	チーム練習 チームの課題を確 認し、それに応じ た練習を選択して 行う	チーム練習 チームの課題を確 認し、それに応じ た練習を選択して 行う	チーム練習 チームの課題を確 認し、それに応じ た練習を選択して 行う
25												
30	試しのゲーム	シュートゲーム	シュートゲーム	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート	チャレンジ シュート2 ステップでコーン (守備)をかわして シュート
35												
40	4対4	4対4	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0	2対0
45	オールコート	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	ハーフ、攻守交代	オールコート
50												
片付け 学習の振り返り												
時間		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
態度	①					②						
思考・判断		①							②			
技能				①				②				
知識・理解					①					②		
態度				①								
思考・判断			①						②			
技能									(1) ②			① ②
知識・理解				①						②		

3 学習活動について

表2 学習活動

学習内容	ステップ	学習活動	行い方	コート図	ねらい
<p>①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをする</p>	<p>ステップで守備者を振り切ってシュート</p>	<p>ボールを自分で保持した状態から</p>	<p>自分でボールを持ってステップ(3歩)をしてシュートする。スタート位置は1mごとに置かれたマーカーから自分で選択する。</p>		<p>ステップからのシュートができるようにする。</p>
		<p>ボールを手渡しで受け取ってから</p>	<p>走り込んで仲間からボールを手渡しで受け取り、ステップをしてシュートにつなぐ。</p>		<p>ボールを受け取りステップからのシュートにつなぐことができるようにする。</p>
		<p>ボールをパスで受け取ってから</p>	<p>仲間からボールをパスで受け取り、ステップをして守備者を振り切るつもりでシュートにつなぐ。</p>		<p>仲間からボールを受け取り、ステップからのシュートにつなぐことができるようにする。</p>
	<p>ステップで守備者をかわしてシュート</p>	<p>ボールを自分で保持した状態から</p>	<p>自分でボールを持って守備者に見立てたコーンをステップでかわしてシュートにつなぐ。</p>		<p>ステップで守備者をかわすことができるようにする。</p>
		<p>ボールをパスで受け取ってから</p>	<p>仲間からボールをパスで受け取り、守備者に見立てたコーンをステップでかわしてシュートにつなぐ。</p>		

学習内容	ステップ	学習活動	行い方	コート図	ねらい
①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをする	ステップを活用して仲間と協力し、守備者をかわしてシュート	チャレンジシュート3 2対1	ステップで守備者をかわして、シュートをねらう。Aにボールを渡し、スタートする。守備者の動きに応じて、Aが自分でシュートするか、Bに手渡してシュートをする。守備者はAかBにつく。		ステップを活用して、仲間と協力して守備者のマークをかわすことができるようにする。
		3対1	ステップを活用し守備者をかわして、シュートをねらう。輪にいるAにボールを渡し、スタート。守備者の動きに応じて、Aが自分でシュートするか、BやCにボールを手渡してシュートする。		ステップを活用して、より多くの仲間と協力して守備者のマークをかわすことができるようにする。
②パスやドリブルなどでボールをキープする	ステップを活用し、守備者をかわしてシュートをする。	ドリブルなし・手渡しパスゲーム 3対3	ステップを活用し守備者をかわしてシュートをする。その際、手渡しパスで味方からボールをもらってよい。 (ドリブルは禁止、パスは手渡しパスのみとする。)		ステップを活用し、守備者をかわして動くことができるようにする。

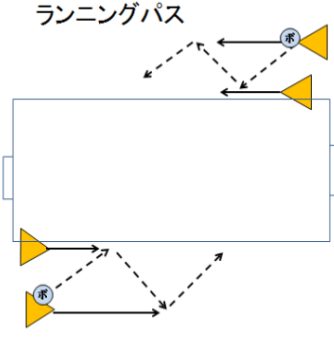
4 授業の実際

【本時の展開】 (1/11時間) 9月13日(火) 第5校時(13:25~14:15)

(1) 本時のねらい

<関心・意欲・態度①>分担した役割を果たそうとすることができるようにする。(評価:3/11時間)

(2) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価		
はじめ (10分)	1 準備運動 2 集合・整列・挨拶・出席確認 3 オリエンテーション ・学習の見通しをもつ。	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・本時の学習のねらいや授業の進め方を説明する。		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">自分の役割を確認し、授業の流れを覚えよう。</div>			
なか (35分)	4 ボール操作(ドリル確認) ・ランニングパス ・シュート練習 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ランニングパス 2人組で走りながらパスをつなぐ。1本目ノーバウンドパス。2本目バウンズパス。3本目ワンドリブル、ノーバウンドパス。4本目ワンドリブル、バウンドパス。</p> </div> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【発問】スピードを落とさないようにパスをつなぐためには?</p> </div> <p>・相手よりも前にパスすることを意識するように促す。</p>		
	5 試しのゲーム ・8チーム ・4対4(3対3) ・オールコート ・試合時間は前半後半1分30秒(間30秒)	・ルールを確認させる。		
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> Aコート(海側) ① 1班対2班 運営 3班 4班 ② 3班対4班 運営 1班 2班 </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> Bコート(体育館側) ① 5班対6班 運営 7班 8班 ② 7班対8班 運営 5班 6班 </td> </tr> </table> </div>	Aコート(海側) ① 1班対2班 運営 3班 4班 ② 3班対4班 運営 1班 2班	Bコート(体育館側) ① 5班対6班 運営 7班 8班 ② 7班対8班 運営 5班 6班
Aコート(海側) ① 1班対2班 運営 3班 4班 ② 3班対4班 運営 1班 2班	Bコート(体育館側) ① 5班対6班 運営 7班 8班 ② 7班対8班 運営 5班 6班			
	6 課題確認 全体・チーム・個人で振り返り			
まとめ (5分)	7 学習の振り返り ・片付けの確認。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする	・協力して片付けるように指導する。 ・自分の役割を確認するように声かけをする。 ・学習カードに記入するように促す。		

【授業者による振り返り】

- ・オリエンテーションの時間が長くなり、ルール説明などを簡潔にまとめる必要があった。
- ・試しのゲームでは、シュートをする生徒が限られていた。
- ・パスやキャッチのボール操作に課題はあるものの、ゴール前までボールを運ぶことはできていた。

【本時の展開】 (2/11時間) 9月15日(木) 2校時(9:50~10:40)

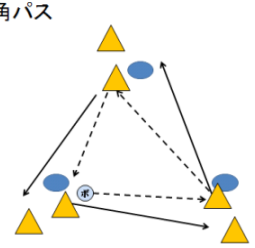
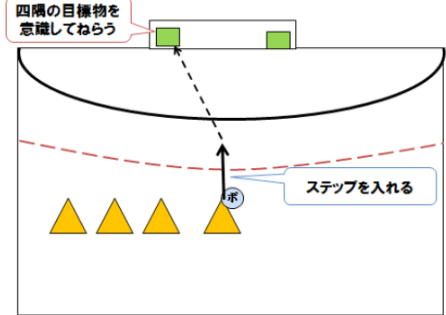
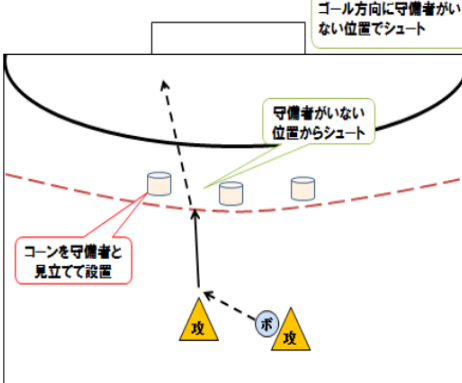
(1) 本時のねらい

《思考・判断①》ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けることができるようにする。(評価: 2/11時間)

(2) 本時の評価

《思考・判断①》ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けることができる。【観察】
【学習カード】(指導2/10時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (5分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明 ・シュートの打ち方について理解する。	・授業の進め方をプリントを使って説明する。
なか (35分)	3 ボール操作(ドリル確認) ・ランニングパス ・三角パス 	<p>三角パス チームごとにマーカーで作られた三角形のポジションに分かれ、パスをつなぐ。パスを出したら、出した方向にそのまま走って移動する。</p> <p>・パスを出した後に、動くという意識を持つように促す。 ・パスを受ける時は、「声を出し、手で欲しい所を示す」ことを伝える。 ・パスを出す時は、「相手の名前を呼ぶ」ことを伝える。</p>
	4 シュート練習 	<p>シュートドリル 1 チームにボール2個、ゴールの両端に置かれたコーンを狙って、シュート。味方はボールを素早く拾って、次にパス。</p> <p>【発問】シュートを決めるために意識することは？</p> <p>・キーパーがいない四隅をねらう。</p>
	5 シュートゲーム2対0 	<p>2人でパスをつないで、シュートを決める。時間内で多くのゴールを決められるようにする。コーンを守備者と見立てて設置しているので、シュートコースにコーンがないようにする。</p> <p>・ハーフコート ・センターラインからスタート ・1分30秒×前半後半×攻守交代×2試合(セット間、入れ替え45秒)</p> <p>・コーンが目の前にない位置でシュートを打つように促す。 ・ゴール四隅の目標物をねらい、キーパーが止めにくいコースを意識するよう声かけをする。</p>
まとめ (10分)	6 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	<p>・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入させる。 《思考・判断①》ボール操作やボールを持たないときの動き等の技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けることができる。【学習カード】</p>

【授業者による振り返り】

- ・三角パスでは、流れを確認するのにかなり時間がかかった。
- ・シュート練習では、全員がもっと積極的にステップを使った練習を組む必要があると思った。
- ・シュートゲームでは、班対抗で時間の制限を意識したので生徒は楽しそうに活動していた。
- ・タイムマネジメントと生徒とのやり取りからねらいに導くことが課題であると指摘されたので、改善していく。

【本時の展開】 (3/11時間) 9月20日(火) 3校時(10:50~11:40)

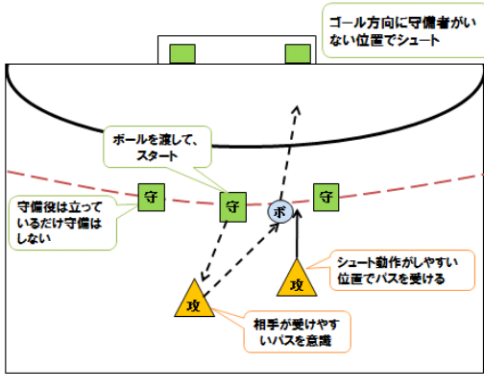
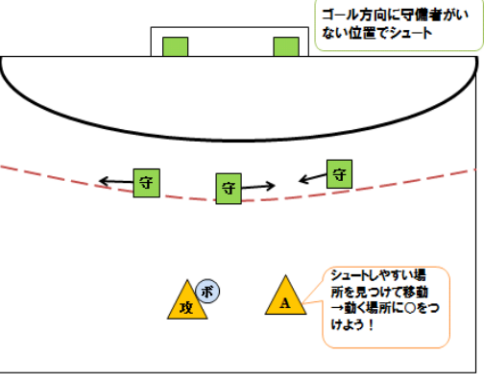
(1) 本時のねらい

<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができるようにする。(評価:10/11時間)

(2) 本時の評価

《関心・意欲・態度①》分担した役割を果たそうとしている。【観察】(指導:1/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (20分)	1 集合・整列・挨拶・出席確認・準備 2 本時のねらいと学習の進め方の説明 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをしよう </div> 3 ウォーミングアップ ・準備運動・ランニング(パス) 4 ボール操作 ・基本技能確認 ・三角パス	《関心・意欲・態度①》分担した役割を果たそうとしている。【観察】 ・パスを出す時は、相手が操作しやすいパスを意識するように声をかける。 ・パスを受ける時は、声を出し、手でほしい所を示すことを伝える。
なか (20分)	5 シュートゲーム2対0 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 3人の守備役がゴールエリアライン前に立ち、守備はしない。守備役からボールを受けてスタートし、1本のパスで、守備役がいない位置からシュートする。 </div> ・ゴール方向に守備者がいない位置で、シュートすることを意識するよう声かけをする。 ・シュート動作がしやすい位置でパスを受けることを意識するよう声かけをする。
まとめ (10分)	6 シュートゲーム2対0 守備位置変化 ・毎回変化する守備の位置を見て、得点しやすい空間を見つけて移動する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 【発問】どこでパスを受けたらシュートしやすい？ </div> スタートはシュートゲームと同じ。守備役は、攻撃側にボールが渡るまでに定位置から1歩だけ動くことができる。攻撃側はそれを見てシュートコースと得点しやすい空間を意識して動き、シュートする。 ・2分間攻守交代×2セット×2試合(セット間、入れ替え45秒)
まとめ (10分)	7 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。

【授業者による振り返り】

- ・生徒に一度に多く説明し実施するのでなく、動き方ができたら声を掛け合うなど、できることを増やしていく指導を心掛けた。
- ・ゴール方向に守備者がいない位置とステップなどのシュート動作がしやすい位置との兼ね合いが難しく、まずはシュート動作を開始できる位置を確認することが必要であった。
- ・守備者が動くゲームでは、前半は動きやルールの理解に時間がかかったが、後半は守備者の位置を見て移動している生徒が増えてきた。

【本時の展開】 (4/11時間) 9月26日(月) 4校時(11:50~12:40)

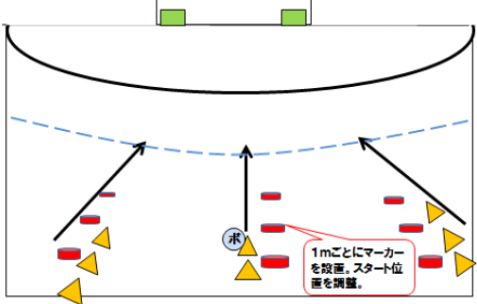
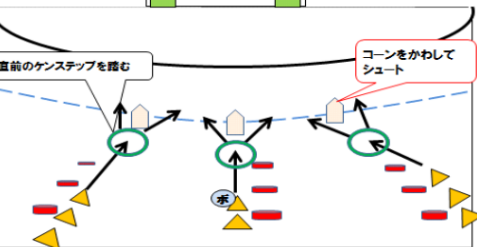
(1) 本時のねらい

<知識・理解①>技術の名称や行い方について学習した具体例を挙げることができるようにする。(評価:4/11時間)

(2) 本時の評価

<知識・理解①>技術の名称や行い方について学習した具体例を挙げている。【学習カード】
(指導:4/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (10分)	1 集合・整列・挨拶・出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">ステップを使ってシュートできる範囲を広げよう</div>	
なか (35分)	3 ウォーミングアップ ・準備運動、ランニング(パス) ・三角パス	・パスを出す時は、相手が操作しやすいパスを意識するように声をかける。 ・パスの回数を声に出してカウントさせ、スピードを高めていくように促す。
	4 チャレンジシュート1 ステップを使ってシュートする。ステップを有効に使えば、1つのシュート動作でねらえるゴールの範囲が広がることを理解する。 ・ゴールから少し離れた位置で、ボールを持った状態からシュートにつながるステップを行う。シュート動作のスタート位置を3ヶ所(左、中央、右)作り、ローテーションで複数のシュートコースを練習する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">チャレンジシュート1</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">ステップを使ってシュート</div> 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">【発問】自分でシュートがねらいにいける場所はどこから？</div> <ul style="list-style-type: none"> ・マーカーをゴール方向に1mごとに設置し、シュートの種類や自分のスピードに合わせて、スタート位置を調整していく。 ・ゴールの四隅に目標物を設置し、シュート動作に慣れてきたらコースや強さを意識することも伝える。 ・ステップシュート ・1ドリブル+ステップシュート(発展) ・1ドリブル+ジャンプシュート(発展)
まとめ (5分)	5 チャレンジシュート2 コーン(守備)をゴールエリアライン前に置いて、シュートにつながるステップでコーンをかわしてシュートする。ステップで守備をかわしてのシュートが有効であることを理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">チャレンジシュート2</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">ステップで守備者をかわしてシュート</div> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール方向に守備者がいない位置で、シュートすることを意識させる。 ・発展として、シュート直前で、ステップでタイミングよく守備をかわしてシュートすると有効であることも伝える。 ・コーンの手前にケンステップを置き、そこでステップの1歩目(0歩目)の足を踏み入れ、相手の直前でかわすことを意識するよう声をかける。
	6 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。 <知識・理解①>技術の名称や行い方について学習した具体例を挙げている。【学習カード】

【授業者による振り返り】

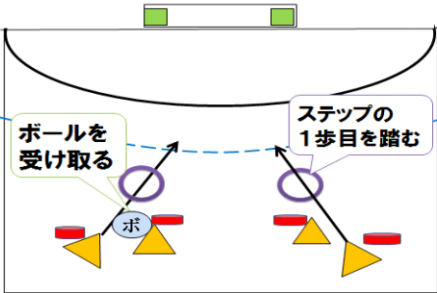
- ・集合、準備運動など、生徒が授業の流れを把握し始めスムーズに活動できるようになってきている。
- ・シュートの順番待ちをしている時間が長く、動き出しも遅かったため、グループ単位ではなく個人で積極的に練習できるようにする必要があった。
- ・ケンステップで、足を着く場所を示すことは、苦手な生徒にも分かりやすく有効だと感じた。

【本時の展開】 (5/11時間) 9月27日(火) 3校時(10:50~11:40)

(1) 本時のねらい

<関心・意欲・態度②>仲間の学習を援助できるようにする。(評価:7/11時間)

(2) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認 2 本時のねらいと学習の進め方の説明 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">パスを受けてステップからシュートしよう</div> 3 ボール操作 ・ランニングパス ・三角パス	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・パスの回数を声に出してカウントさせ、スピードを高めていくように声をかける。
なか (35分)	4 ボールを手渡しで受けてからのチャレンジシュート1 ・ボールを保持した後にシュートにつながるステップを行う。歩数を最大限に生かして、ケンステップでステップが踏めるように意識する。 ・味方の手の上のボールを取ってステップからシュートする ↓ ・味方からの手渡しでボールを受け取りステップからシュートする。 	・前回学習したステップを入れたシュートにつなげていく。 ・空中でキャッチすると、最大4歩ステップできることを伝え、空中でボールを受けることを意識するよう声かけをする。 ・ステップの1歩目(踏み切る足)をケンステップで踏むことを意識させる。
	5 パスを受けてからのチャレンジシュート1→2 ・シュートをする人は、手前のケンステップでパスを受けられるようにステップの途中で、パスを出す人に手と声で合図を出す。 →発展として、ステップの途中でパスを空中で受け、着地(0歩目)を手前のケンステップで踏む。 ・パスを出す人は、受ける人が手で示した場所に出すようにする。 	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">【発問】もらいたい場所で、パスを受けるために大事なことは？</div> ・パスを受ける時は、声を出し、手でほしい所を示すことを伝える。 ・パスを出す時は、味方が操作しやすいパスをすることを意識するように促す。 ・空中でキャッチしたら、手前のケンステップで0歩目を踏むことを意識するように声をかける。 ・発展として、前回行ったステップで守備(コーン)をかかわす動きを入れたり、シュートをジャンプシュートにしてみる。
まとめ (5分)	6 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。

【授業者による振り返り】

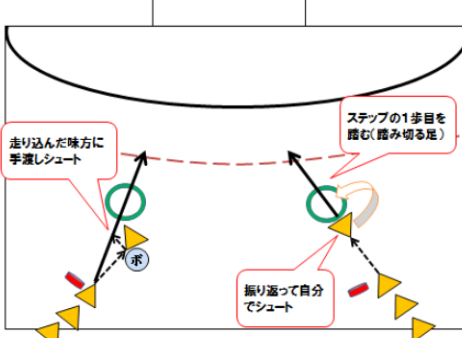
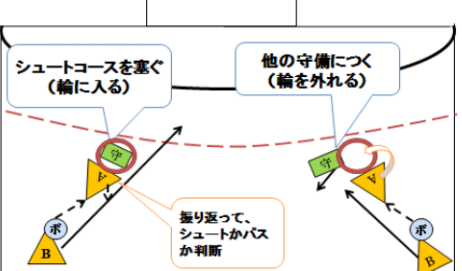

- ・空中でボールをキャッチすることを意識しているが、その後のステップのスピードが遅くなってしまう生徒が多かったので、ステップのスピードも意識させたい。
- ・パスを受けたい場所を手で示せる生徒が増えてきた。
- ・発展として、最後にステップで守備のコーンをかかわす動きを取り組んだが、その前段階でつまづいている生徒も多かったため、自分の課題に合った練習を選択させてもよかった。

【本時の展開】 (6/11時間) 9月29日(木) 2校時(9:50~10:40)

(1) 本時のねらい

<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができるようにする。(評価:10/11時間)

(2) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明	
なか (35分)	3 ボール操作 ・ランニングパス ・三角パス	<p style="text-align: center;">仲間と協力して、ステップからシュートをしよう</p>
	4 パスを受けての手渡し、振り向きシュート	
	5 2対1 チャレンジシュート3	
	<p>手渡し、振り向きシュート</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを背にした状態でパスを受け、走り込んできた味方にボールを手渡しし、ステップからシュートさせる。 ・ゴールを背にした状態でパスを受け、自分で振り向いてシュートをさせる。 ・ステップの1歩目は、ケンステップを目安にできるように設置するよう指示する。
	<p>2対1 ステップを活用し、仲間と協力し守備者をかわしてシュート</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・攻撃Bはまず、攻撃Aにパスを出し、攻撃Aの脇に走り込む。 ・守備者は攻撃Aのシュートコースを防ぐか(輪に入る)、攻撃Bの守備につく(輪を外れる)かを選択する。 ・守備者はコースを塞ぐだけで、直接ボールを取りにいかない。 ・パスを受けた攻撃Aは、ゴール方向に守備者がいなければ、シュートまで行く。シュートコースを塞がれたら、走り込んでいる攻撃Bにボールを手渡しする。 <p style="text-align: center;">【発問】状況に応じたプレイ選択をするのに大事なことは？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・守備者の様子や味方の状況を把握することを意識するよう促す。
	<p>3対2 DFの守備位置が制限されたゲーム</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・守備のエリアを3つに区切り、守備者は決められたエリアでしか守備ができない。 ・攻撃は最初から中央にいる味方にパスをつなぎ、ゴール方向に守備者がいない場合は積極的にシュートをする。 ・守備者がいる場合は、手渡しやパスなどで、他の攻撃者が走り込んでシュートをねらう。 ・攻撃はシュートゾーンには3秒以上入れない。 ・ハーフコート ・センターラインからスタート ・1分30秒で攻守交代×2セット×2試合(セット間、入れ替え45秒)
まとめ (5分)	7 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。

【授業者による振り返り】

- ・三角パスでは、パスのスピードが出てきて回数が増えてきているグループが多い。
- ・守備位置が制限されたゲームでは、攻撃がかなり有利だったので、守備の制限を無くしてもよい。
- ・ルールや制限が多く、混乱している生徒が多かったのもっとシンプルなものにする。

【本時の展開】 (7/11時間) 10月4日(火) 3校時(10:50~11:40)

(1) 本時のねらい

＜技能②＞パスやドリブルなどでボールをキープすることができるようにする。(評価:10/11時間)

(2) 本時の評価

＜関心・意欲・態度②＞仲間の学習を援助しようとしている。【観察】(指導:5/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・見学者にコメントカードを配る。
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明	
	3 ボール操作 ・ランニングクロスパス(ランニングパスをクロスしながら手渡しで行う) ・三角パス	仲間と協力して、ステップからシュートをしよう
	4 2対1 チャレンジシュート3	・スタート位置を前回までより、ゴールから遠くし、離れた位置からでもステップや1ドリブルを使ってシュートにいくようにさせる。 ・自分でシュートにいけると判断したら、すぐにシュートすることを意識させる。 ・走り込んで手渡しでもらう場合は、本来なら自分にも守備がついていることも意識し、味方のすぐ脇を通過することを指導する。
	5 3対1 チャレンジシュート3	・攻撃Bはまず、攻撃Aにパスを出し、攻撃Aの脇に走り込む。 ・守備者は攻撃Aのシュートコースを防ぐか、攻撃Bの守備につくかを選択する。 ・守備者はコースを塞ぐだけで、直接ボールを取りにいかない。 ・パスを受けた攻撃Aは、ゴール方向に守備者がいなければ、シュートまで行く。シュートコースを塞がれたら、走り込んでいる攻撃Bにボールを手渡しする。
	6 ゲーム3対3 ドリブルなし・手渡しパスゲーム	・スタートは中央の攻撃から開始 ・ドリブルなし(シュート時の1ドリブルはOK) ・パスなし(手渡しのみ) ・守備はチームで分担した人につく ・点線より内側でシュートすると2点、他は1点。 ・1分30秒で攻守交代×2セット
なか (35分)	4 2対1 チャレンジシュート3	<p>【発問】守備者がいない位置でステップからシュートする動きをチームで考えてみよう</p> <p>・守備者がいない位置でシュートを打てる状況のために、ボールを保持した後の動きをチームで考えさせる。 ・始めにプレイの優先順位と動きの例を紹介する。 ・プレイの優先順位を念頭に、チームで作戦ボードを使用して、自分の役割と動きを確認しながら練習させる。</p> <p>＜関心・意欲・態度②＞仲間の学習を援助しようとしている。 【観察】</p> <p>優先順位 ①ゴール方向に守備者がいなければ自分でシュート ②味方に走り込んでもらい手渡し</p>
	5 3対1 チャレンジシュート3	<p>・攻撃Bはまず、攻撃Aにパスを出し、攻撃Aの脇に走り込む。 ・守備者は攻撃Aのシュートコースを防ぐか、攻撃Bの守備につくかを選択する。 ・守備者はコースを塞ぐだけで、直接ボールを取りにいかない。 ・パスを受けた攻撃Aは、ゴール方向に守備者がいなければ、シュートまで行く。シュートコースを塞がれたら、走り込んでいる攻撃Bにボールを手渡しする。</p>
おしま (5分)	6 ゲーム3対3 ドリブルなし・手渡しパスゲーム	・作戦ボードを使用し、作戦の動きを確認する。 ・パスが出せないで常にボールをもらいに行く動きを意識するよう伝える。
	7 学習の振り返り	・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。

【授業者による振り返り】

- ・前半の学習は、守備が前回のイメージで積極的な守備をしないグループが多かった。
- ・ドリブル・パスなしゲームでは、手渡ししかできないので、密集してしまう傾向が強かったが、そこを解決していくことが次の課題である。
- ・チームで作戦を積極的に考えているチームと、なかなか取り組めないチームがあったのでチームごとに対応する必要があった。

【本時の展開】 (8/11時間) 10月7日(金) 1校時(8:50~9:40)

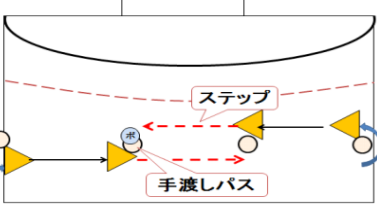
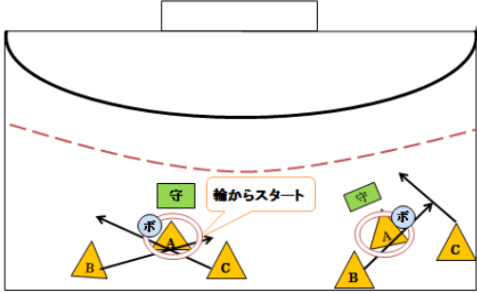

(1) 本時のねらい

<思考・判断②>自己やチームの課題を見付けることができるようにする。(評価:8/11時間)

(2) 本時の評価

<思考・判断②>自己やチームの課題を見付けている。【学習カード】【観察】(指導:8/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価	
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 見学者にコメントカードを配る。 	
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明		
なか (35分)	3 ボール操作 <ul style="list-style-type: none"> ランニングパス、ランニングクロスパス 三角パス 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> ステップを活用し仲間と協力してシュートチャンスを広げよう </div>	
	4 ランニング手渡しパス 		<ul style="list-style-type: none"> 動きながらボールを手渡しすることにより、攻撃の幅が広がり、ゲームでも密集しないことにつながることを説明する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 中央にあるマーカの間をボールを持ってステップ3歩でいき、マーカの間で手渡しパスをする。渡した後も、そのまま走り抜け、サイドラインで折り返す。次の人は、前の人からボールを受け取る時に走り込んでいく。 </div>
	5 3対1 チャレンジシュート3 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> ステップを活用し、仲間と協力し守備者をかわしてシュート </div> 		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 【発問】人が密集しないようにするために、意識することは？ </div> <ul style="list-style-type: none"> ゴール前で手渡しパスをすると、人が密集するので、ゴールから離れた位置で手渡しパスをし、遠くでもステップや1ドリブルを使いシュートすることを確認させる。 動きながらの手渡しパスを意識し、渡した後も動きを止めないように意識するように声をかける。
6 3対3 ドリブルなし・手渡しパスゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 作戦ボードを使用し、作戦の動きを確認させる。 パスが出せないで常にボールをもらいに行く動きを意識するよう伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> スタートは輪から開始(どちらからでもよい) ドリブルなし(シュート時の1ドリブルはOK) 手渡しパスのみ 輪へのリセットのパスはOK 守備はチームで分担した人につく 点線より内側でシュートすると2点、他は1点。 2分間で攻守交代×2セット セット間で作戦タイム3分 </div>		
まとめ (5分)	7 振り返り <ul style="list-style-type: none"> アドバイスカードも含めてチームでゲームを振り返る。 学習カードに記入する。 次時の確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> <思考・判断②>自己やチームの課題を見付けている。【学習カード】【観察】 今日の学習内容について振り返るよう促す。 学習カードに記入するよう指示する。 	

【授業者による振り返り】

- 動きながらの手渡しパスを練習したり意識するよう声かけをしたが、ゲームで発揮することはあまりなかった。
- リセットのパスを有効に使うチームがいくつかあり、密集する前にシュートに持ち込む場面があった。
- キーパーがいなくて遠くからループシュートを打つ場合があるので、改善する必要がある。

【本時の展開】 (9/11時間) 10月13日(木) 2校時(9:50~10:40)

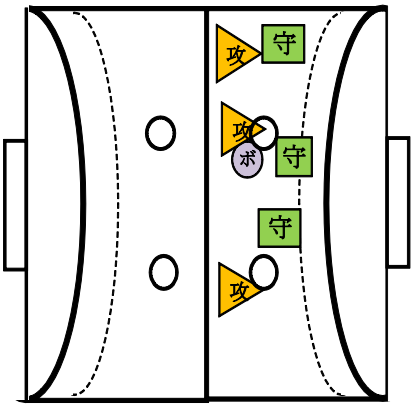
(1) 本時のねらい

＜知識・理解②＞試合の行い方について、学習した具体例を挙げることができるようにする。(評価:9/11時間)

(2) 本時の評価

＜知識・理解②＞試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。【学習カード】【観察】(評価:9/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価						
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・見学者にコメントカードを配る。						
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明							
なか (35分)	チームの課題に応じた練習をしよう							
	3 基本技能ボール操作 ・ランニングパス ・三角パス							
	4 チームで課題練習 チームの課題について確認し、チームカードに課題を解決するために意識する動きと、それに対する練習内容を選択する。選択した練習内容を基本とし、意識する動きや内容を明確にして、ゲームでの達成度を評価できるようにする。	・これまでのゲームでの課題の例を挙げ、動きの例を紹介する。 ・作戦ボードを使って、動きを確認させる。						
5 3対3 ドリブルなしオールコート ・ゲーム①後に振り返りを行い、その後同じ相手とゲーム②を行う。	・チームカードに記録と話し合いをした内容はまとめるよう指示する。							
		<ul style="list-style-type: none"> ・開始、再開はフロントコートの輪から始める(2つのうちどちらからでもよい) ・攻撃はフロントコートの輪を経由しないとシュートにいけない ・フロントコートの輪まではパスOKだが、輪以降はパスなしで手渡しのみ(輪へのリセットのパスはOK) ・ドリブルなし(シュート時のワンドリブルはOK) ・守備はチームで分担した人につく ・ゴールキーパーなし ・点線より内側でシュートすると2点、他は1点。 ・2分間で前後半 間30秒 ・空きチームは作戦と動きの確認 						
		<table style="margin: auto;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">Aコート(部室側)</td> <td>Bコート(体育館側)</td> </tr> <tr> <td>① 1班 対 5班</td> <td>① 3班 対 7班</td> </tr> <tr> <td>② 2班 対 6班</td> <td>② 4班 対 8班</td> </tr> </table>	Aコート(部室側)	Bコート(体育館側)	① 1班 対 5班	① 3班 対 7班	② 2班 対 6班	② 4班 対 8班
Aコート(部室側)	Bコート(体育館側)							
① 1班 対 5班	① 3班 対 7班							
② 2班 対 6班	② 4班 対 8班							
まとめ (5分)	6 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	<p>＜知識・理解②＞試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。 【学習カード】【観察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。 						

【授業者による振り返り】

- ・課題練習では、自分たちの課題を明確にして練習を選択して行っていたチームが多かったが、中には話し合いがうまく進まないチームがあったので、支援が必要であった。
- ・メインゲームでは初めてオールコートでゲームを行ったの併せて、生徒はルールの変化に戸惑いうまくゲームが流れなかった。パスもゴール前の輪まで解禁したが、どこまでパスがOKなのか曖昧な理解のままゲームがスタートしたため混乱していた。
- ・最後のシュートが手渡しの制約が残っているため、せっかくあるゴール前の空間を有効に使えていない。

【本時の展開】 (10/11時間) 10月17日(月) 3校時(10:50~11:40)

(1) 本時のねらい

<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができるようにする。(評価:10/11時間)

<技能②>パスやドリブルなどでボールをキープすることができるようにする。(評価:10/11時間)

(2) 本時の評価

<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる【観察】(指導:3/11時間)

<技能②>パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。【観察】(指導:7/11時間)

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価		
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認 2 本時のねらいと学習の進め方の説明 ・自己やチームの課題について理解する。 3 基本技術ボール操作 ・ランニングパス ・三角パス	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・見学者にコメントカードを配る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> チームの課題に応じた練習をしよう </div>		
なか (35分)	4 チームで課題練習 前回までのゲームを振り返り、チームの課題について確認し、チームカードに課題を解決するために意識する動きと、それに対する練習内容を選択する。選択した練習内容を基本とし、意識する動きや内容を明確にして、ゲームでの達成度を評価できるようにする。 5 ゲーム 4対4 オールコート <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・手渡しパス後のシュートは2点 ・ゴールキーパー有り ・オールコート ・守備はチームで分担した人につく ・試合時間1分30秒×前半後半×4試合(ハーフタイム30秒、試合間1分) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> Aコート(部室側) ① 1班対7班 ② 2班対8班 ③ 1班対2班 ④ 3班対4班 </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> Bコート(体育館側) ① 3班対5班 ② 4班対6班 ③ 5班対6班 ④ 7班対8班 </td> </tr> </table> </div>	Aコート(部室側) ① 1班対7班 ② 2班対8班 ③ 1班対2班 ④ 3班対4班	Bコート(体育館側) ① 3班対5班 ② 4班対6班 ③ 5班対6班 ④ 7班対8班	・これまでのゲームでの課題の例を挙げ、動きの例を紹介する。 ・前回の課題練習を振り返り、内容を整理する。 ・作戦ボードを使って、動きを確認させる。 ・キーパーの安全面についての説明をする。 ・チームカードに記録と話し合いをした内容はまとめるよう指示する。 <技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。【観察】 <技能②>パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。【観察】
Aコート(部室側) ① 1班対7班 ② 2班対8班 ③ 1班対2班 ④ 3班対4班	Bコート(体育館側) ① 3班対5班 ② 4班対6班 ③ 5班対6班 ④ 7班対8班			
まとめ (5分)	6 学習の振り返り ・学習を振り返る。 ・学習カードに記入する。 ・次時の確認をする。	・今日の学習内容について振り返るよう促す。 ・学習カードに記入するよう指示する。		

【授業者による振り返り】

- ・課題練習では、オリジナルの動きを考え出すチームが出てきたり、選択した練習方法の中でうまく工夫をしている。
- ・メインゲームでは、ゴール前でのパスが可能になったので、サイドも含めた空いている空間を有効に使うチームが一気に増えた。
- ・ゴール前でパスが出せない場面があったので、そこで手渡しのパスを有効に使えると良かった。

【本時の展開】 (11/11時間) 10月18日(火) 3校時(10:50~11:40)

(1) 本時のねらい

<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができるようにする。

<技能②>パスやドリブルなどでボールをキープすることができるようにする。

(2) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価										
はじめ (10分)	1 準備運動・集合・整列・挨拶・出席確認	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 見学者にコメントカードを配る。 										
	2 本時のねらいと学習の進め方の説明											
なか (35分)	ステップを活用し仲間と協力して、ゴール方向に守備者がいない位置でシュートしよう											
	3 基本技能ボール操作 <ul style="list-style-type: none"> ランニングパス 三角パス 											
	4 チームで課題練習 前回までのゲームを振り返り、チームの課題について確認し、チームカードに課題を解決するために意識する動きと、それに対する練習内容を選択する。選択した練習内容を基本とし、意識する動きや内容を明確にして、ゲームでの達成度を評価できるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> パスが出せない時にボールをもらいに行く動きを強調し、手渡しパスを有効に使う意識を持たせる。 これまでのゲームでの課題の例を挙げ、動きの例を紹介する。 前回の課題練習を振り返り、内容を整理する。 作戦ボードを使って、動きを確認させる。 ゴールキーパーの安全面についての説明をする。 										
5 まとめのゲーム 4対4オールコート	<ul style="list-style-type: none"> チームカードに記録と話し合いをした内容をまとめて記入するよう指示する。 											
	<ul style="list-style-type: none"> 手渡しパス後のシュートは+1点 全員パスが回ると+1点 ゴールキーパー有り オールコート 守備はチームで分担した人につく 試合時間1分30秒×前半後半×4試合(セット間30秒、試合間1分) 											
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px;">Aコート(部室側)</td> <td style="padding: 2px;">Bコート(体育館側)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">① 1班対8班</td> <td style="padding: 2px;">① 3班対6班</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">② 2班対7班</td> <td style="padding: 2px;">② 4班対5班</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">③ 1班対2班</td> <td style="padding: 2px;">③ 5班対6班</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">④ 3班対4班</td> <td style="padding: 2px;">④ 7班対8班</td> </tr> </table>	Aコート(部室側)	Bコート(体育館側)	① 1班対8班	① 3班対6班	② 2班対7班	② 4班対5班	③ 1班対2班	③ 5班対6班	④ 3班対4班	④ 7班対8班	
Aコート(部室側)	Bコート(体育館側)											
① 1班対8班	① 3班対6班											
② 2班対7班	② 4班対5班											
③ 1班対2班	③ 5班対6班											
④ 3班対4班	④ 7班対8班											
まとめ (5分)	6 学習の振り返り <ul style="list-style-type: none"> 学習を振り返る。 学習カードに記入する。 次時の確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 今日の学習内容について振り返るよう促す。 学習カードに記入するよう指示する。 										

【授業者による振り返り】

・ゴール方向に守備者がいなかったら積極的にシュートをする場面が増えてきて、これまでゲームでシュートができなかった生徒もシュートをする機会が増えた。

・パス回しが上手くなっていて、互いに走りながらのパスが通るようになり、ゲームのスピード感が上がってきた。

・ステップや1ドリブルで遠くからシュートに持ち込む場面もあった。

5 検証授業の結果と考察

研究主題に迫るために、検証授業から得られたデータを基に、分析の視点と方法（参照：第3章1（7）p8）に沿って検証し、授業を通してシュートにつながるステップを身に付けることにより、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートが容易になり、ゲームの中でシュートが増えたかどうかを考察していくことにする。なお、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲームでは、同じチームの対戦を比較している。

（1）シュートにつながるステップが身に付いたか

ア シュートにつながるステップの歩数の変容（映像分析）

図2は1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム（オールコート4対4）において、シュートをした際のステップの歩数を映像から分析し、その割合の変容を示したものである。1時間目から11時間目にかけて、1歩以下が34%減少し、2歩が11%、3歩が23%と、それぞれ増加した。

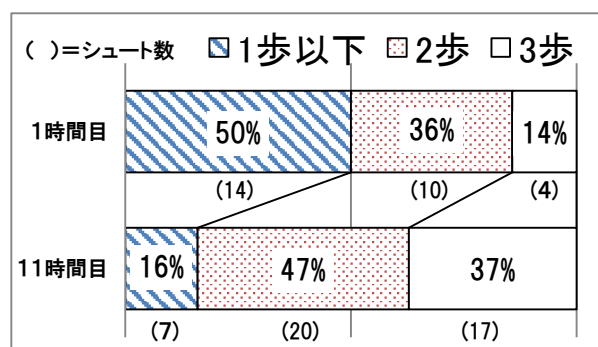


図2 シュートにつながるステップの歩数の割合

<考察>

（1）シュートにつながるステップが身に付いたか

2歩と3歩のステップを使ったシュート本数と割合が増えたことから、シュートにつながるステップを踏むことができるようになったと考えられる。これは、4・5時間目に行った「チャレンジシュート1」でステップからのシュート練習をしたことにより、ステップの動きが身に付いた生徒が多くなったことによると考えられる。

そして、2歩以上のステップの割合が増えたことから、投動作の軸足だけでなく、守備者を振り切るためにステップを使うことができるようになったと考える。つまり、ボールを保持して止まった状態からのシュートではなく、ステップからのシュートとなったと考える。

よって、「チャレンジシュート1」がシュートにつながるステップの動きを身に付けるために有効であったと考えられる。

(2) ステップにより守備者を振り切り、守備者をかわすことができたか

ア シュートにつながるステップでの移動距離の変容 (映像分析)

図3は、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム (オールコート4対4) において、シュートにつながるステップを開始した位置とステップで移動し最終的にボールをリリースした位置の距離を映像から分析し、移動距離が1 m以上の回数を示している。11時間目は1時間目と比較すると、全ての班において移動距離が長いシュートにつながるステップが増えた。

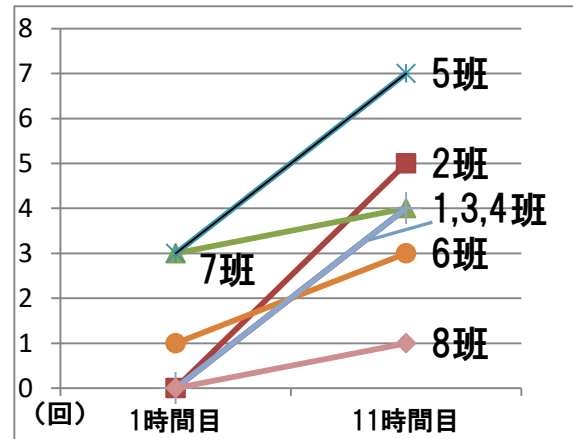


図3 シュートにつながるステップで1 m以上移動した回数

イ ステップによりゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした本数の変容 (映像分析)

図4は、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム (オールコート4対4) において、ステップによりボール保持者とゴールとの間に守備者がいない状況でシュートをした数を映像から分析し、その本数の変容を示したものである。1時間目が4本、11時間目が19本となり、15本増加した。

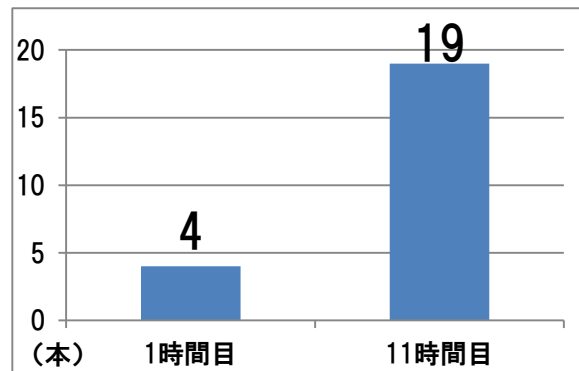


図4 ステップによりゴール方向に守備者がいない位置でのシュート数

ウ ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをした、守備者を振り切るステップの回数と守備者をかわすステップの回数の変容 (映像分析)

図5は、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム (オールコート4対4) において、ステップによりボール保持者とゴールとの間に守備者がいない状況でのシュートをした数を映像から分析し、守備者を振り切るステップが見られた回数と守備者をかわすステップが見られた回数の変容を示したものである。守備者を振り切るステップは1時間目が4回、11時間目が15回となり、11回増加した。守備者をかわすステップは1時間目が0回、11時間目が4回となり、4回増加した。

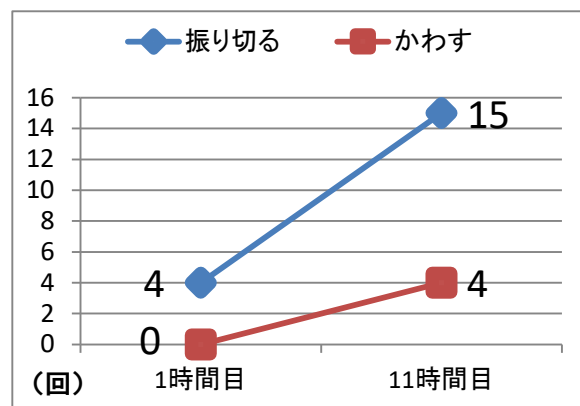


図5 守備者を振り切るステップの回数と守備者をかわすステップの回数

<考察>

(2) ステップにより守備者を振り切り、守備者をかわすことができたか

「チャレンジシュート1」は、できるだけ遠くからステップでゴールに近づくことをねらいとした。これにより、ボールを保持してからシュートまでの移動距離が伸びた。1時間目のゲームでは、守備者にまったくマークされていない状態でも、ゴール手前でボールを保持した際に、ドリブルしたり、自分よりゴールに近い味方にパスを出したりしていたため、ゴール方向に守備者に入られる時間を与えることがあった。しかし、ステップを使って、ボールを保持した状態での移動距離が伸びたことにより、ゴールから離れた位置からでも自分でステップを使ってゴールに近づいて、シュートすることができるようになった。最終的に、ボールをリリースする位置はゴールエリアライン付近でも、すぐにステップを使うことで、ゴール方向に守備者が移動する前にシュートすることができるようになった。つまり、ボールを保持した際に守備者が近くにいても、シュートにつながるステップによって、守備者を振り切ることができるようになったと考えられる。

4時間目と5時間目に行った「チャレンジシュート2」では、ステップを使って、守備者（コーン）をかわす動きを練習した。このことにより、ステップ中に進行方向を変える動きや守備者との間合いを調整する動きを身に付け、守備者がゴール方向にいても、それをかわしてゴール方向に守備者がいない位置でシュートできるようになったと思われる。そして、守備者をかわしてシュートにつながるステップがそのままシュートの助走となり、パスを選択するよりも、自らステップで守備者をかわしてシュートすることにつながったと考えられる。

6時間目から8時間目にかけて「チャレンジシュート3」で行った守備者がいる2対1や3対1の練習の中で、手渡しパスとステップを活用し仲間と協力して、シュートにつながる練習をした。これにより、ゴール前でのパスに比べ、相手にボールを奪われにくく、そのままシュートに持ち込めることから、ステップで守備者をかわす回数が増えたと考えられる。

7時間目と8時間目に行った「ドリブルなし・手渡しパスゲーム」では、移動手段がステップと手渡しパスだけのため、この学習活動の序盤では、コート中央付近でのプレイが多く、人が密集する傾向にあった。しかし、シュートにつながるステップ中にシュートコースに角度をつけたり、ステップでサイドから中央に切り込むようなシュートや、逆に中央からサイド方面へステップしながらシュートコースを探ったりする動きも出てきた。これらの動きにより、正面だけでなく、様々な方向からもシュートができるようになった。これにより、6時間目から11時間目のゲームでは、さらにステップを活用して守備者をかわす回数が増えたと考えられる。

(3) シュートする本数や人数が増えたか

ア ゲームにおけるシュート本数の変容
(映像分析)

図6は、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム（オールコート4対4）において、シュート数を映像から分析し、1試合の平均を示したものである。1時間目が約3.5本、11時間目が約5.6本となり約2.1本増加した。

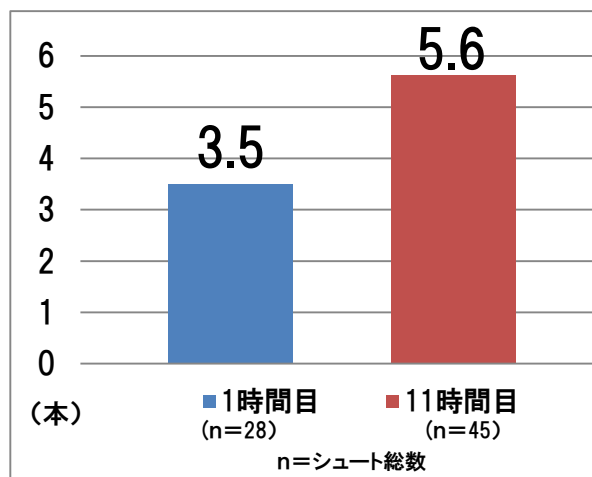


図6 チームの平均シュート数の推移（オールコート4対4）

イ ゲームにおけるシュートした人数の変容（映像分析）

図7は、1時間目の試しのゲームと、11時間目の最終ゲーム（オールコート4対4）において、シュートをした人数を映像から分析し、1試合におけるチームでの平均を示したものである。なお、1チームのフィールドプレイヤーはゴールキーパーを除いた3人である。1時間目が約2.1人、11時間目が約2.9人となり約0.8人増加した。

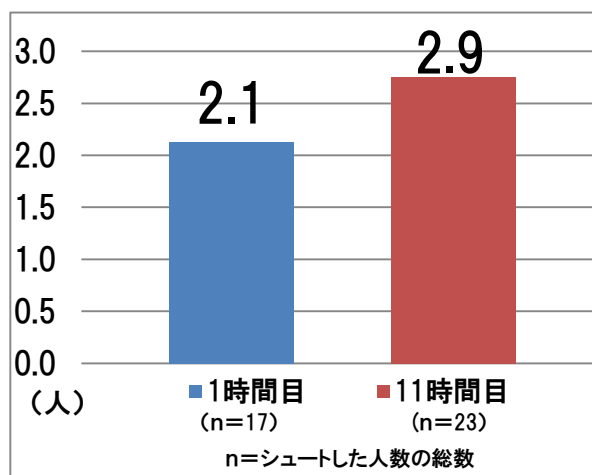


図7 チームの平均シュート人数の推移（オールコート4対4）

<考察>

(3) シュートする本数や人数が増えたか

ゲームにおけるチームのシュート本数とシュートした人数が増加したことから、個人及びチームにおいて、ゲームでのシュート本数が増えたと言える。

1時間目のゲームでは、ドリブルが得意な生徒が自分でゴール前まで持ち込み、そのままシュートしたり、ゴール前にいる味方にパスを通そうとしてもパスを受け取れなかったり、カットされたりして、失敗する場面が多く見られた。そのため、シュートの本数は少なく、シュートする生徒も限られていた。この状況から、11時間目のゲームでは、ステップを使って守備者を振り切ったシュートや、守備者をかわしたシュートが増えた。そして、特定の生徒だけでなく、全体的にシュートにつながるステップが身に付いたことで、シュートする人数が増えたと考えられる。

(1)と(2)の考察で述べてきたように、個々の生徒がシュートにつながるステップを身に付けたことにより、ゴール方向に守備者がいない位置でシュートができる状況を作れるようになった。これが、今回シュート数が増加した要因だと考えられる。

(4) 分析の視点に沿った検証のまとめ

結果と考察から、次のことが明らかになった。

○単元の学習活動を通して、シュートにつながるステップが身に付いた。

「チャレンジシュート1・2・3」や「ドリブルなし・手渡しパスゲーム」などの学習活動が、シュートにつながるステップを身に付けるために有効であったと考えられる。

○シュートにつながるステップを活用することで、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートができるようになった。

ボールを保持した際に守備者が近くにいても、ステップによって、守備者を振り切ることができるようになり、また、守備者をかわすことができるようになった。そして、ステップによりボールを保持しての移動距離が伸び、様々な方向からシュートすることができるようになった。

○個人及びチームとして、ゲームでのシュート本数が増えた。

個々の生徒がシュートにつながるステップを身に付けたことにより、ゴール方向に守備者がいない位置でシュートができる状況を作ることができるようになり、シュート本数の増加につながったと考えられる。また、特定の生徒だけでなく、多くの生徒がシュートできるようになった。

6 学習指導の工夫とその効果及び課題

(1) 学習活動について

表3 学習活動の工夫とその効果及び課題

学習活動	工夫	効果	課題	
チャレンジシュート1	ステップからのシュート↓ステップでマークを振り切るシュート	ゴール方向に1mごとにマーカを設置し、スタート地点を自分で調整することができるようにした。	自分の歩幅やスピードに合った位置を探し、より遠い位置からのシュートにつながるステップに取り組めるようになった。	マーカに歩幅を合わせる生徒がいた。また、1歩目の動き出しが遅いと、移動する距離が短くなるので、声をかける必要があった。
	ケンステップで、0歩目と1歩目の着地位置を特定し、確認できるようにした。	最初に踏み出す足を決められない生徒や距離感がつかみにくい生徒に分かりやすい目安となった。また、0歩目のケンステップはボールを渡す側にとっても、どの位置に出すのかという目安になった。	0歩目と1歩目のステップで、スピードが上がってくると1歩目の位置が変化するので、1歩目の位置を自分で調整するなどの対応が必要であった。	
	ステップに合わせて、周囲が歩数を数えて声を出すようにした。	歩数が分かりやすくなり、リズムをつくってステップに取り組むことができた。	発声のリズムが間延びすると、ステップも間延びするため、声はステップする人にリズムを合わせる必要であった。	
チャレンジシュート2	ケンステップで、守備者をかわすステップの1歩目の着地位置を特定し、確認できるようにした。	守備者をかわすために必要な守備者との距離感を意識することができた。どちらにステップを踏み始めたらいいかの目安となった。ステップ中に進行方向を変え、シュートコースを変えることにつながった。	実際に守備者を立たせることにより守備者をかわすために必要な距離感を持たせる必要があった。	
	ステップ中に、足を踏み込む角度を変えることを意識させ、守備者をかわすことができるようにした。	最後の足の踏み込み角度を広げることができ、確実にステップで守備者をかわしながらシュートすることにつながった。	角度を変えるタイミングについても指導する必要があった。	

学習活動		工夫	効果	課題	
チャレンジシュート3	ステップを活用して仲間と協力し、守備者をかわしてシュート	2対1・3対1	守備者はコースを防ぐのみとし、直接ボールを奪えないといった守備制限を段階的に設定し、ステップの学習に集中できるようにした。	守備者に防がれることが少なくステップや仲間との動きに集中でき、段階的に実践でのシュートにつながるステップに近づけていくことができた。	ルールや制限を多くし過ぎて分かりにくくならないよう配慮する必要があった。
			スタート位置をゴール前から段階的に離し、遠い場所からでもシュートにつながるステップでゴールに近づくことを意識させた。	ステップを使ってゴールに近づくようになり、シュートの際の助走につながった。	遠い場所からそのままシュートする生徒もいたため、シュートに有効な位置を示す必要があった。
ドリブルなし・手渡しパスゲーム	ステップを活用し、守備者をかわしてシュート(ゲーム)	3対3	ドリブルを禁止しと手渡しパスのみとすることにより、ステップのスピードと角度を引き出した。	守備者にパスカットされることがないので、ステップに集中することができた。 人がコート中央に集中することに気付き、サイドへ移動することを意識できるようになった。	通常のドリブルやパスを取り入れた際に、シュートにつながるステップが有効なボールキープとして意識できるよう指導が必要であった。

(2) 教材・教具について

表4は教材・教具についての工夫と効果及び課題について表に示したものである。

表4 教材・教具の工夫とその効果及び課題

教材・教具	工夫とその効果および課題
<p>カラーライン</p> 	<p>シュート動作に入る目安の位置をカラーラインで可視化したことにより、ステップを開始する目安となり、ゴールまでの距離感やシュートできる距離感がつかめない生徒に分かりやすかった。また、シュートがねらえる位置を意識することができたが、生徒によっては、多少遠すぎたり、近すぎたりで、目安であることを強調する必要があった。</p>
<p>ケンステップ</p> 	<p>ステップのスタートやボールを受ける位置などに設置した。最初に踏み出す足が決められない生徒や距離感がつかめない生徒に分かりやすかった。ステップのスピードが上がってくると、適切な位置が個々に異なることから、目安として捉えさせ各自で調整するなどの対処が必要であった。</p>
<p>ゴールの目標物</p> 	<p>ゴールキーパーが防ぎにくいゴールの四隅にビブスとコーンを設置し、それを目標物として、ねらうことができるようにした。ゲームでは、目標物に当てると得点を2点として、狙う意識を高めた。ゴールキーパーがいない設定では、単なる的当てのようにならないように注意する必要があった。</p>
<p>ボール</p> 	<p>小学生用のソフトタイプのハンドボールを使用した。中学生用のハンドボールより柔らかいため、スピードのあるシュートやパスがあっても痛みによる恐怖心を緩和することができた。また、全員が片手で持つことが可能で、ボール操作がしやすく、学習活動が活発となった。</p>

7 授業全体を振り返って

前項まで今回の検証授業について、分析の視点に沿って振り返ってきたが、ここでは授業全体を振り返っていききたい。

(1) 事後アンケート「自分でシュートする機会が増えたか」と「チームでシュートする機会が増えたか」の回答結果について

ア 「自分でシュートする機会が増えたか」の結果について

図8は事後アンケート「自分でシュートする機会が増えたか」の回答結果である。「思う」「どちらかといえば思う」を合わせた回答を肯定的な回答とすると、肯定的な回答をした生徒は約82%となっている。

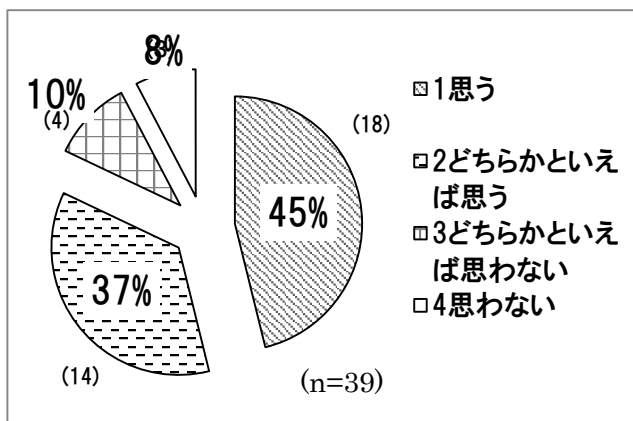


図8 事後アンケート「自分でシュートする機会が増えたか」の回答

イ 「チームでシュートする機会が増えたか」の結果について

図9は事後アンケート「チームでシュートする機会が増えたか」の回答結果である。「思う」「どちらかといえば思う」を合わせた回答を肯定的な回答とすると、肯定的な回答をした生徒は約84%となっている。

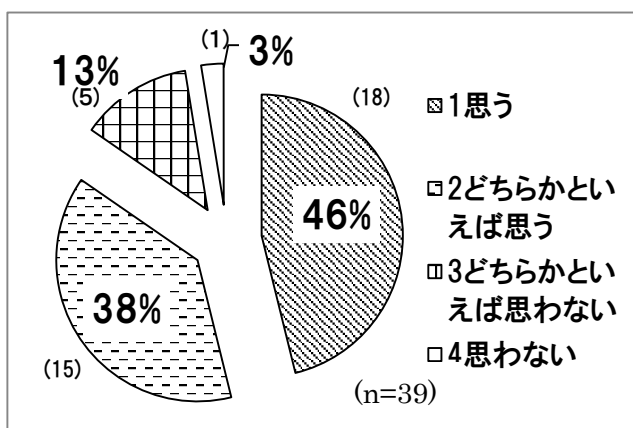


図9 事後アンケート「チームでシュートする機会が増えたか」の回答

<考察>

(1) 事後アンケート「自分でシュートする機会が増えたか」と「チームでシュートする機会が増えたか」の回答結果について

事後アンケート「自分でシュートする機会が増えたか」の回答理由で、「シュートにつながるステップの学習で、自信を持ってシュートに行く人が増えた」と回答している。その一方で、たとえシュートチャンスであったとしても「シュートを決める自信がないので、他の人にパスをしていた」と回答していた生徒もいた。「シュートを決める自信」が、シュート本数に影響していると考えられるが、ステップによるスピードのあるシュートや、守備者をかわす動きは、その自信を持たせるものになったと考えられる。

事後アンケート「チームでシュートする機会が増えたか」の回答理由で、「ステップからのシュートの学習で、全員がシュートすることができるようになり、チーム全員がシュートをねらえるようになった」という回答があった。ステップがシュートのチャンスを広げ「全員がシュートをねらえるようになった」と考えられる。

(2) 事後アンケート「ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートができるようになったか」の回答結果について

図10は事後アンケート「ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートができるようになったか」の回答結果である。「思う」「どちらかといえば思う」を合わせた回答を肯定的な回答とすると、肯定的な回答をした生徒は約75%となった。

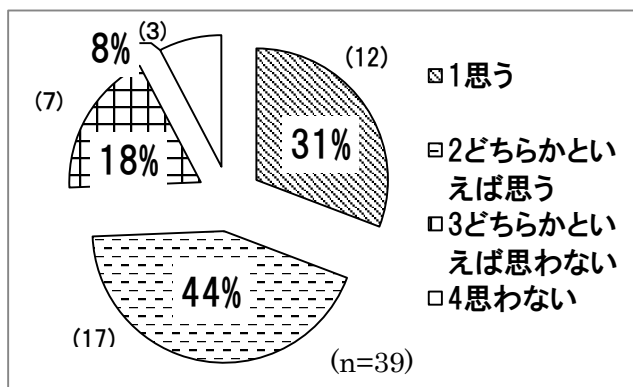


図10 事後アンケート「ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートができるようになったか」の回答

<考察>

(2) 事後アンケート「ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートができるようになったか」の回答結果について

回答理由より、「ステップにより守備者をかわす動きを教えてもらったから」や「ステップにより相手をかかわしてシュートできた」など、「チャレンジシュート2」における、守備者をステップでかわす動きの学習で意識が高まり、「ゴール方向に守備者がいない位置でのシュート」ができるようになったと考えられる。

(3) 事前・事後アンケート「相手にボールを奪われないようにすること」の結果について

図11は事前・事後アンケート「相手にボールを奪われないようにすること」に対する難易度の回答結果である。「やさしい」「とてもやさしい」を合わせた回答をした生徒は、事前の48%から事後では、64%となっている。「難しい」「とても難しい」を合わせた回答をした生徒は、事前の51%から事後では、36%となっている。

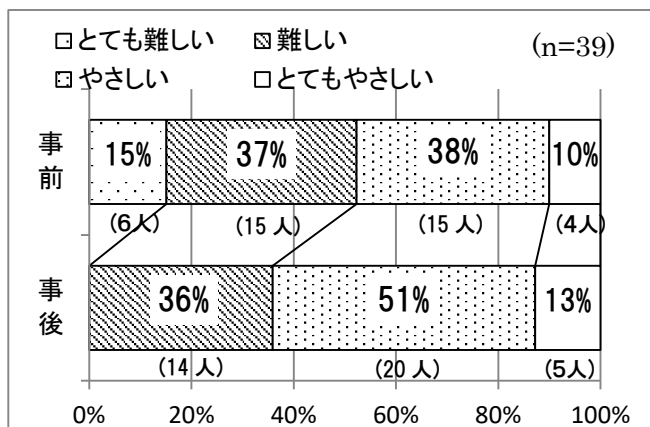


図11 事前・事後アンケート「相手にボールを奪われないようにすること」に対する難易度の回答

<考察>

(3) 事前・事後アンケート「相手にボールを奪われないようにすること」の結果について

6時間目から8時間目にかけて「チャレンジシュート2」の発展として行った守備者がいる2対1や3対1の学習の中で、手渡しパスとステップを活用して、シュートにつなげる学習をした。これにより、ゴール前でのパスが減少し、相手にボールを奪われず、そのままシュートに持ち込むことができるようになったため、「やさしい」「とてもやさしい」の回答が増えたと考えられる。

(4) 事後アンケート「自分でシュートをねらえる範囲が広がったか」の回答結果について

図12は事後アンケート「自分でシュートをねらえる範囲が広がったか」の回答結果である。「思う」「どちらかといえば思う」を合わせた回答を肯定的な回答とすると、肯定的な回答をした生徒は約77%となっている。

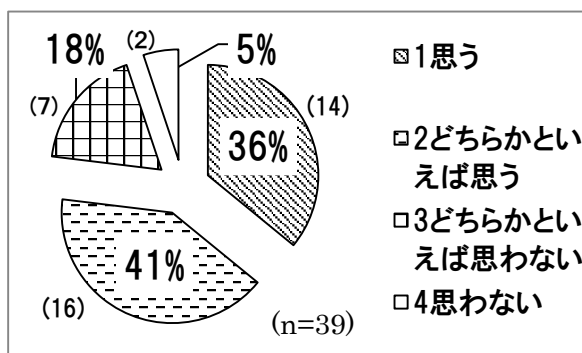


図12 事後アンケート「自分でシュートをねらえる範囲が広がったか」の回答

<考察>

(4) 事後アンケート「自分でシュートをねらえる範囲が広がったか」の回答結果について

回答理由より「ステップからのシュートができるようになったから」、「シュート練習で歩数などを体で覚えられたから」と答えている生徒がいた。「チャレンジシュート1」の学習により、シュート時に自然とステップを使うことや、遠い位置からでもステップでゴール方向に近づけることを実感しているようだった。また、「いろいろなコースでシュートを打てたから」や「動ける範囲が広がったから」など、「チャレンジシュート2」や「チャレンジシュート3」の学習による成果で、ステップを活用し、仲間と協力して守備者をかかわすことによりシュートコースが広がったことがうかがえる。

(5) シュート時のステップの歩数について

図13は6時間目のゲーム(ハーフコート3対2)と、7時間目・8時間目のゲーム(ハーフコート3対3)でのシュートをした際のステップの歩数を映像から分析し、その歩数の平均の変容を示したものである。6時間目から8時間目にかけて0.4ポイント増加した。

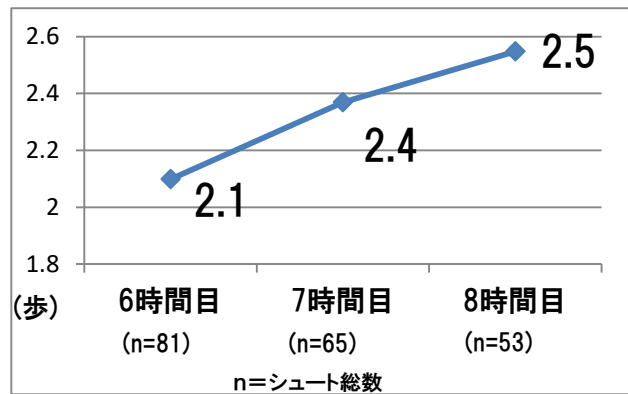


図13 ゲームにおけるシュート時のステップの歩数の推移

<考察>

(5) シュート時のステップの歩数について

7時間目・8時間目のゲーム(ハーフコート3対3)では、ドリブルなし手渡しパスというルールだったので、ステップを使ってシュートする場面が多く見られた。このステップが定着し、その後のドリブルとパスが制限されていないゲームにおいても、シュートにつながるステップの歩数増加につながったと考えられる。

第4章 研究のまとめ

1 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究では、中学校第2学年の球技：ゴール型「ハンドボール」の授業において、シュートにつながるステップを身に付けることにより、ゴール方向に守備者がいない位置でのシュートが容易になり、ゲームの中でシュートをする機会が増えるであろうと仮説を立て検証を行った。研究の成果として次のことが明らかになった。

チャレンジシュート1において、シュートにつながるステップを身に付ける学習をしたことにより、止まらずに流れの中でシュートができるようになった。また、ステップでの移動距離が伸び、ゴールに近づいて、シュートすることが可能になった。そして、ステップによって、守備者を振り切ることができるようになった。

チャレンジシュート2では、ステップ中に進行方向を変える動きを身に付け、守備者がゴール方向にいても、それをかわしてシュートする意識が高まった。ドリブルなし・手渡しパスゲームでは、ステップを活用し仲間と協力して守備者をかわすことができるようになった。

(2) 今後の課題

今回の研究を通して、次のような課題が見えてきた。

チャレンジシュート1では、ステップでの移動距離が個々で異なるので、マーカークラインは目安として捉えさせる必要があると思われる。チャレンジシュート2では、始めからステップからシュートを行っていたが、慣れるまではかわす動きだけを学習してもよいと思われる。また、様々な角度からのステップを、段階的に行うことが、より多くの動きを身に付けるために必要であると思われる。ドリブルなし・手渡しパスゲームでは、人が密集する傾向にあるので、空いているスペースはできるが、それを活用することができなかったため、1回の攻撃で2回のパスを認めるなどのルールの変更が必要であった。また、守備者がいないと実践から遠ざかり、反対に守備が厳しすぎるとステップが発揮されにくくなることから、守備の制限の設定が難しいと感じた。また、段階的にルールや制限を緩和する際に、ルールが複雑になったり、変更により分かりにくくなるため、極力シンプルにすべきだと感じた。

2 今後の展望

本研究の球技：ゴール型「ハンドボール」の授業を通して、ステップの段階的な取組みから、守備者を振り切ったりかわしたりするシュートにつながるステップを身に付けさせることができた。これにより、学習指導要領の第1学年及び第2学年の例示に示されている「ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをする」「パスやドリブルなどでボールをキープすること」を身に付けることができた。またステップの動きは、ステップシュートやジャンプシュートなどの発展するハンドボールのシュート技術に必要なものであり、第3学年の例示に示されている「守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つこと」の習得にもつながる重要な要素となると考える。

さらに、ステップは佐藤が冒頭で述べているように、「多彩なボールテクニックや巧みなドリブル及びフットワークによるフェイントなどの『複合技術』」³⁾であることから、シュートだけでなく他の技能を高めることにつながることもできる。特にパスやドリブルを組み合わせることで、様々な攻撃のバリエーションの可能性が出てくる。

また、本研究においては、「ボール操作」に焦点を当てて実践してきたが、第3学年においては、ステップを活用し仲間と協力してかわすことを通して「安定したボール操作」と共に「空間を作り出すなどの動き」を併せて指導したい。これにより、仲間と連携した動きによってゴール前の空間を使ったり、空間を作りだしたりして攻防を展開することができるようにしていきたいと考える。

3 最後に

本研究で行ったシュートにつながるステップの学習を通して、自信を持ってシュートをする生徒が増えた。印象的だったのは、運動を苦手としている生徒が、1時間目のゲームでは、自分からゲームに参加しようとせず、その場に留まるだけであったが、授業が進むにつれシュートにつながるステップを身に付け、積極的にステップからのシュートをしたり、ゲームに参加しようとする姿勢が見られるようになった。授業後のアンケートには、「シュートは入らなかったが、ゴールに投げることはできた。」と記述しており、「自分でシュートする機会が増えた」の質問に「どちらかといえば思う」と回答していた。最後のゲームでは、自信をつけて懸命にプレイする姿があり、授業を通じた成長を見ることができた。

また、「ステップで守備者をかわす動き」が出てくると、ボール保持者に対してこれまでよりも守備者が警戒して、空いた場所ができることとなり、パスが通りやすくなった。これまで自分でボールを持ち込んでシュートをしていた生徒も、仲間の動きをよく見るようになり、空いた場所へ移動した仲間にパスを出すことができ、楽しむ様子が見られた。このように攻撃のバリエーションも増え、シュートチャンスが作れるようになり、結果的に一部の生徒だけではなく、多くの生徒シュートができるようになった。

そして、研究を通して改めて、学習内容を分かりやすい学習活動で生徒に提示し、どのような動きを学ぶのかを理解させた上で、段階的に指導することが大切であり、それがゴール型の特性を楽しむ活動的で運動量のある授業の展開につながるということがわかった。

本研究を行うにあたり、大変お忙しい中、快く受け入れてくださり協力をいただいた、横須賀市立田浦中学校の校長先生をはじめ、保健体育科及び他教科の教職員の皆様に深く感謝申し上げます。また、専門的な見地から指導、助言をいただいた、神奈川県教育委員会教育局保健体育課、横須賀市教育委員会、神奈川県立体育センターの方々に深く感謝申し上げます。そして、授業に積極的に取り組んでくれた田浦中学校2年4組の生徒の皆さんと協力してくださった保護者の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

[引用・参考文献]

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 東山書房 2008年9月
- 2) 福ヶ迫善彦「シュートチャンスを作る局面を学ぶ戦術学習の授業モデル」 『体育科教育』大修館書店 pp. 50-52 2009年9月
- 3) 松本直也・廣津信義・吉村雅文「スペインにおけるFútbol17に関する戦術的分析」 桃山学院大学総合研究所紀要第41巻 第1号 2015年
- 4) 佐藤久「ハンドボール競技におけるステップ法について」 仙台大学研究紀要 第14号 1982年
- 5) 埼玉県立スポーツ研修センター「体育授業改善に向けた指導と評価に関する実践的研究（3年次）」 埼玉県立スポーツ研修センター研究報告書第77号 2011年3月
- 6) 北原準司・中村博一・岩田靖「小学校体育における侵入型ゲームの授業実践—戦術行動の視点からみた「課題ゲーム」の検討—」 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No. 6 2005年
- 7) 公益財団法人 日本ハンドボール協会『ハンドボール競技規則2016年版』 2016年
- 8) 熊谷智史「中学生のハンドボール指導における左サイドシュートの運動発生に関する例証分析的研究」『ハンドボール研究』巻：16（号） pp106-124 2014年
- 9) ヨアソ・クソスト＝ゲルマネスク（中村一夫訳）『ハンドボール技術と作戦』 ベースボール・マガジン社 pp. 16 1981年